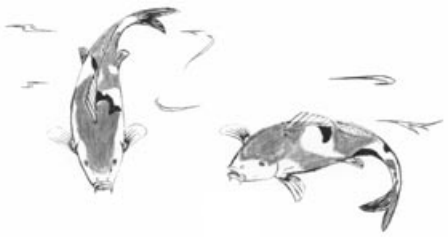
慈　恵

令和２年　No.71



夏

宗教法人 慈 恵 院　　付属 多摩犬猫霊園

鑑賞

袋ふ(には)盤何可(か)あるそ登(と)問ふたらい　月雪花の夢能(の)黒焼。泥舟併題。

「泥舟先生墨香」より

高橋泥舟(でいしゅう)

幕末の幕臣。槍術に秀で、国事に通じ、講武所教授となり、一八六三年（文久三）新徴組を統率。鳥羽伏見の戦後、恭順謹慎説を主張。江戸城明渡し後は徳川慶喜を護衛。山岡鉄舟・勝海舟と共に幕末三舟と称。（一八三五―一九〇三）

寝ころんだ小僧に一礼した師匠

宗演十六歳の時、建仁寺山内両足院の峻嶮和尚について学んでいた。旦夕の托鉢、作務、米踏み、掃除洗濯という小僧生活である。

ある日、師匠の峻嶮和尚が外出していた折、宗演は本堂の縁側に寝ころんでいたが、やがてそのまま眠ってしまった。そのうちに、師匠の峻嶮和尚が帰って来た。和尚は、宗演が寝ころんでいるのをまたがずに、足のほうに回ると、おもむろに宗演に向かって一礼して行った。

夢うつつのうちにこれを知った宗演は、深く師の態度に感じたのだった。のち宗演はこのことを回想し、つねにいった。

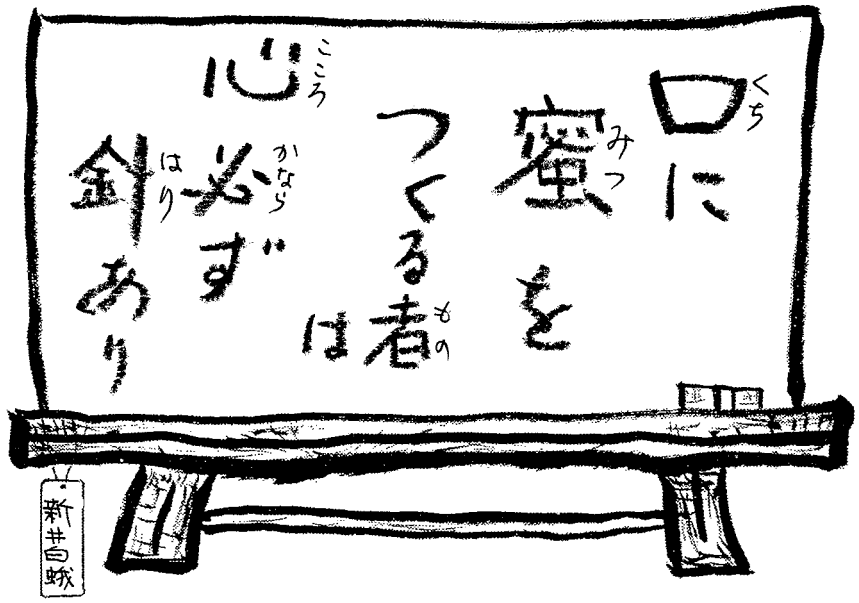
「いやしくも法門に身をゆだねる者は、万事にこのような謙譲慈悲の心がなければならん」

「禅門逸話集成」より

釈宗演（一八五九～一九一九）

臨済宗。建仁寺、岡山曹源寺に学び、のち円覚寺今北洪川に参じ、その法を嗣いだ。慶応義塾に入学して普通学を修めたのち、セイロンに遊学した。また、明治二十六年には渡米し、万国宗教大会に出席した。円覚寺、建長寺両山の管長に就任した。

掲示板



くぅちゃんが家族になって

府中市　飯野　恵美（57）

令和二年一月十日、くぅとお別れをしました。くぅは平成十九年、繁殖引退犬四歳で我家の家族の一員になりました。出逢いはまだ娘が小学生の時に動物が好きで近所のペットショップに犬を見に行ってました。おそらく、シーズーのブリーダーさんだった様なんですが「あるブリーダーさんが病気になって赤ちゃんを産めなくなってきたチワワの女の子がいるのよ。可愛がってくれるのであればもらってくれる」最初は乗り気ではありませんでした。病気もするし、ましてリタイア犬は難しくないかと心配でした。どうしても、一緒に見に行ってという事でそのショップに足を運んだのです。とても熱い視線を送ってくる彼女は本当に可愛い眼差しをしていました。しかし、その場では返事をせず又次の日に見に行きました。体重は４kgお世辞にもチワワではなくタヌキの様なお腹が可愛らしく、けれどその下腹部には痛々しい傷がありました。子宮蓄膿という病気で手術をして間もないとの事でした。その彼女を連れ帰りました。当時を思い出すと人間には威嚇し、ご飯も食べてくれず、部屋の隅の定位置で座っていました。散歩も慣れてはいないというより散歩自体が初めての様でリードを振り払って勝手に走って戻ってきません。ご飯は何とか食べる様になってくれましたが、この子はどんな生活をしていたのかな?と、とても悲しくなりました。部屋の隅の定位置の生活は１年程でした。やがて眠る時は家族の布団に入ってくる様になりました。本当に彼女と過ごした時間は楽しくて海へ一緒に行ったりどこへ行くのも常にそばにより添ってくれていました。彼女が我家に来た当初、娘は不登校でした。無理に学校へは行かせずそんな時は彼女と過ごし抱っこし散歩をする事が日課になっていました。そんな事を思い出しながら、令和元年のクリスマスイブに初めて彼女にお芋のケーキを作りました。その頃は十六歳で足腰もだいぶ衰えて、秋口からてんかん発作の様な年齢も年齢なのでお医者も特に検査はせず看取りましょうという事で様子を見ていましたが、そのケーキを食べた翌日より息も荒く絶えそうでお正月迄は持たないかもしれないと言われました。４kgあった体重は半分になりもはや身体を支えるのもやっとでしたが便意のある時は家族を呼びます。トイレシーツに連れて行くと真黒いタール便が出て、この時私達家族はもうお別れが近いのかなと思いました。「明日は誕生日だね。ケーキ食べようね。」誕生日の日はフラフラと歩いていてケーキを半分食べて、そのまま眠り、夜中は苦しいのか痛いのかトイレに連れて行けと泣き続けました。介護疲れの日々でしたが最後朝五時頃

トイレに連れて行きましたが意識を失い布団に戻し、七時頃、見ると亡くなっていました。その前の晩、娘が彼女に「もうお母さんとけんかしないよ。だから安心して。」と言ったそうです。見届けるかの様に逝ってしまいました。ありがとうくぅちゃん。仲良くするよ。お誕生日の翌日でした。とても大切な家族でした。

苦労も思い出のうち

東村山市　北見　次美(60)

昔はペットと言えば犬でしたが、近年猫の飼育率が犬を上回り、猫の飼いやすさが注目を集めています。我が家は代々犬ばかり飼ってきましたがトイレの躾や散歩の必要がないのはとても楽で猫もいいなと思いました。しかし、今まで共に過したわんちゃん達のご機嫌な顔で散歩している姿を思い出すとペットと一緒に散歩ができないのは少し物足りなく感じます。

子供がまだ幼稚園児だった頃、登園の際には私と娘とその当時飼っていた犬のケンとよく散歩を兼ねて通っていました。大抵の子供は動物が大好きなのでケンはとても人気者で幼稚園に到着するとすぐに囲まれてもみくちゃにされてしまいます。ケンもそこは慣れたもので、もともとの性格のお祭り好きのお調子者みたいなところがあったので楽しそうに子供達と触れ合っていました。誰にでも愛想よく振る舞うのでお母様方にも人気があり、本人はまったくそのつもりはないと思いますが、「覚えていてくれたの！」とよく感激されていました。お散歩が大好きで、私と二人っきりだと常に前のめりで先頭をきってせかせかと歩いて行きますが、そこに娘が加わり三人になると私と娘の間に入って私達の歩調に合わせてゆっくりと歩き、さらにご満悦な様子が印象的でした。

その後に迎えた幸も散歩が大好きで、私がリードを手にすると玄関で時計回りにぐるぐる回転します。散歩中も喜びが抑えきれない様子で常に浮足立っています。興味を引くものが多いのか終始キョロキョロと注意力散漫で、停車中のトラックや電信柱に気付かずにぶつかりそうになったり、ぶつかったりしていました。ご機嫌に尻尾をピンと立てて、足の運びに合わせて垂れた耳が上下にピョコピョコ揺れる姿を見ながら散歩するのが密かに楽しみでした。

その次に迎えた楓は子犬の頃から室内で一緒に過したため、トイレだけは徹底的に躾をしました。強制的にトイレに入れられた楓がペットシーツの上で寝てしまったことがあり、私たちはいつ用を足すのかとやきもきしつつ、あどけない寝顔に見入っていたこともありました。もちろん失敗することも多く、完璧にマスターするまでかなりの時間を要しました。それでも14歳で虹の橋を渡るまでトイレ以外の場所で粗相をすることは一切ありませんでした。

手のかかる子ほど可愛いとはよく言いますが散歩や躾の苦労も今では大切な思い出のひとつです。

〔万葉集〕　暇(いとま)あらば　拾(ひり)ひに行(ゆ)かむ　住吉(すみのえ)の